

講演

仕事に人生を捧げろ

宗次徳二氏

講師の宗次氏は一代でカレーハウス COCO 壱番屋の 1225 店に及ぶチェーン店を築きあげた経営者として知られている。その経歴を見れば 18 歳で高校卒業と同時に建設会社に就職し、25 歳で名古屋の北区に喫茶店を開業。

29 歳の時に喫茶店の支店として三店目で人気メニューであったカレーの専門店を開店した。その後の出店の勢いは順調に伸びて、増収増益を続け、会社は東証一部に上場するまでになった。

宗次氏は子どものころ日雇い労働者であった養父とともに極貧の暮らしを送られたことを話され、小学校のころの日課として父親から課せられていたのはパチンコ店の床に捨てられたタバコの吸い残しを拾い集めることであったという。

それでも、それを養父が嬉しそうに吸う姿が宗次少年の喜びであったそうだ。つまり、自分のことより他人が喜ぶ姿を見たいという欲求、そこから飲食業を始める時の経営哲学も、自分のことよりお客さんが喜んでくれることを最優先することになる。

宗次氏は朝 3 時 50 分に起き、4 時には事務所に出るという生活を何年も続けている。事務所のゴミを集め、かつてはトイレの掃除もした。そして、朝の仕事に取り掛かる。朝の時間は貴重である。さらに、時間は生み出すのに元手もいらぬ。

経営に大きな夢など必要なく、1・2 年で達成できる目標を立てて、その日一日を必死に生きる。必死に仕事をやる。今現在があることを最高の幸せとし、この先に不幸が待ち構えているかもしれないと身構える。不景気は未来にこそある。

事業の継承者を社員の中に見つけることができたことほど幸せなことはないと言われる。そこで会社の経営権をすべて後継者に譲渡し、自らは飲食店事業から引退し、クラシック・ホールの経営を新しく始めることにした。現在 8 年目になる。

地下鉄の駅からホールまで歩道 413 m の花壇に自分の好きな花を植え、その管理に余念がない。これも、お客様がクラシック音楽を聴きに来る途中の景色を楽しんでほしいと思うからで、管理者に申し出て花の苗から植栽、散水まで自分たちで行っているとのこと。

会社の経営が軌道にのるとゴルフやクラブなどの付き合いに精を出す経営者が多いが、自分は仕事一筋でやってきた。企業経営者になることはプロスポーツの選手や小説家、画家、音楽家といったプロの職業で生きるよりは容易である。

ただし、安易な気持ちではじめても絶対うまくはいかないものである。最初の喫茶店を開業するとき信用金庫から運転資金の 500 万円を融資してもらったのが大変であった。それから必死に働き、もっとも借入金が多かったときは 140 億円を越していた。真剣に取り組めば、信用は大きくなる。

また、最初の店は資金がなく町のはずれに開かざるを得なかったが、それが自分にとっては大事な経験であり、どうすれば客が入ってくれるか、喜んでくれるかを真剣に考える機会になった。

モーニングサービスを豪華にして競争するような薄利多売の経営は絶対にしなかった。安易な経営は、かならず破綻する。場末の喫茶店でも誠実に真面目にお客様をお迎えし、どうすれば喜んでいただけるかを真剣に考え対応する。そういう雰囲気客にも伝わっていく。

必死に生きることで人生の道は拓け、成功は約束される。しかし、その成功の継承者をどのように選ぶか。宗次氏の選択は会社にとってベストな人材であれば、それ以外の要素はないということであった。

結婚の時に自分に戸籍というものがあり、身内の親族は誰一人いなかったという状況は想像を絶するものであるが、戸籍により根無し草ではないという、アイデンティティーの拠り所を確認できたことは、その後の人生において重要であったと拝察する。

アパートを転々とし、日々の食料にも困るような経済環境においても、養父に反抗せず、その養父を喜ばせようとしたこと背景には、何があったのか。そうした日々において学校の教師や友人はどのような役割を果たしたのか、興味の沸くところではあったが、残念ながら教育の場への言及は少なかった。

♪どぶに落ちて根のある奴は、いつかは蓮（ハチス）の花と咲く♪と歌ったのはフーテンの寅さんこと車寅次郎氏であったが、学校教育が果たす子どもの将来への影響は、いささか過大に評価され過ぎているのかもしれないと思わせた講演でもあった。

第1部研究協議会「学校教育とPTA活動」

「学校からの発信と親の思いを繋ぐPTA活動」～学校の良きパートナーとして～

発表者 愛知県立豊橋商業高等学校
PTA会長 原田和宣氏

地元で豊商としての伝統が知られており、保護者も豊商卒業生が多い傾向にあるとのこと、そのためか、PTAの総会参加者は400名を超えるほどで、体育館が満員になるということでした。

そして、保護者の学校に対する高い関心に応えるように学校は年2回の授業参観を実施して普段の学校と生徒の様子を公開しているとのこと。

ここでもPTAがもっとも盛り上がるのは文化祭での「とん汁亭」の出店だそうです。70名以上の保護者が協力しあって一体になる機会だということでした。

会長は子どもさんが吹奏楽部に所属し、熱心に活動しており、保護者としての協力を申し出た所、顧問の先生に歓迎され、父母会を組織して楽器の運搬などで活動をバックアップされているとのことでした。

学校という場に、保護者として、市民として如何に関われるか。そこから新しい公共が生まれていくように思えました。

第 2 部研究協議会「進路指導と P T A」

進路指導と P T A ～桑名高校の現況に則した支援活動としての取り組み～

発表者 三重県立桑名高等学校
P T A 会長 種 村 英 二 氏

桑名高校は普通科 24 クラス、理数科 3 クラスと定時制、分校の衛生看護本科 3 クラスと専科 2 クラスで 1359 名の生徒が学んでいます。

平成 22 年度の全日制の国公立大学進学者は 144 名。三重大 32 名、名古屋大 10 名、京都・大阪大各 3 名、神戸・東京大各 2 名、その他 90 名となっています。

クラブ活動も盛んで陸上・水泳、放送部を中心に毎年複数クラブが全国大会や東海大会に出場する成績を残しているとのこと。

生徒の進路希望を実現させるために学校では進学協議会を開催し、1 年次から個別面談を実施し、進路ガイダンスや大学見学会などを開催しているそうです。

P T A でも大学見学会として、名古屋大学・南山大学・名城大学を実施し、名大では桑名高校 O B の教授による講義を受け、南山大では学生ガイドによる施設見学。名城大では模擬講義を准教授から受けるという企画が 21 年度に開催されました。

また、P T A の講演会では平成 23 年度より分校の衛生看護科が本校に移転されることが決定しているため、医療についての理解を深める目的で在宅ホスピスの活動で有名な内藤いずみ医師を講師として、市内医療関係者にも門戸を開いた企画が実施されました。

御話をお聞きする限り、進学校としては理想的な支援体制が形成されているように感じました。とりわけ 1 年次からの生徒一人ひとりに個別にきめ細かく進路ガイダンスがなされているところなど印象深く聞かせていただきました。

(以上、文責 中野晴久)